

柿本人麻呂の妻

眺めが良かった鳥見山を下りることとしましよう。

鳥見山の麓には「墨坂」(榛原萩原)というところがあります。こは、以前にもご紹介しましたが、神武天皇が宇陀で戦いを繰り広げたときに敵軍が燎炭(おこしすみ)を置いて、人が通れないように炭火をおこしていたところでもあります。この説話が「墨坂」という地名の起源となっています。また、榛原の集落から見えて「隅にある坂」であることから、「隅坂」と呼んだことに由来するとの説もあります。

では、「墨坂」に因んだ恋の万葉歌をご紹介します。

柿本朝臣人麻呂の妻の歌一首

君が家に 吾住坂(わがすみさか)の家道(いへぢ)をも 私は忘れじ 命死なずは

(『万葉集』巻四・五〇四)

この歌の作者は、柿本人麻呂の妻で、「住坂の家道も(あなたのことも)私は忘れまい、生きている限りは。」と解釈されています(『日本古典文学大系』四)。「あなたのことは、もちろんのこと、あなたの家に向う住坂の道は一生忘れませ

んよ。」と妻が詠っています。

「君が家に」は、「住坂」を導く序詞で、この「住坂」が「墨坂」であると考えられています。

当時の婚姻関係では、男性(君)が女性(吾)の家を訪ねるということが一般的ですが、この歌は、男女が逆になっています。妻が夫を訪ねているのです。このことから、本当は人麻呂が妻に送った歌ではないかとの説もあります。また、君と吾・吾と君とを書き間違えたのではないかという説もあります。

このように諸説はありますが、この歌からは、「私のことを忘れないで!」といった強い思いを読み取ることができそうです。

どのあたりに住まいがあったのかは、わかりませんが、この歌の歌碑は、榛原小学校近くと墨坂神社に建てられています。



墨坂万葉歌碑 (榛原小学校近く)



いじめと向き合う子どもたち

④

「キミのとなりで」か

らいじめを考えるシリーズは、今月が最終回です。

崇の入院中、学校では生徒の個別面談と母親の

ノートの内容から、いじめの全容が解明されます。「加害者」の5人は、心理ケアやロールプレイに基づく個別指導のため、一定期間、教室を離れます。自分たちはクラスのみんなに歓迎されないのでは、と深刻に悩みますが、指導にまじめに取り組み、最後は教室に戻ります。

いじめには「被害者」と「加害者」の他に、「加害者」と共にいじめを面白がってはやしたる「観衆」、自分がいじめられるのを恐れ、見て見ぬふりで無関心を装う「傍観者」の立場もあり、双方苦しみなながらも「加害者」に加担し、心に傷を残します。クラスの誰もがこの4つの立場に分類され、同じ人が、同じ立場で居続けるとは限りません。

「傍観者」や「観衆」だった生徒たちが放課後の「話の場」で、「観衆」はなぜいじめが面白いと思いい、「傍観者」はなぜ見て見ぬふりをしていたのか、自らを見つめ、語り合います。一人の女の子の手紙がきっかけで、みんな

なが手紙を書き、担任の先生が、退院した崇の元に届けました。

崇ははじめ、対話を拒否していましたが、手紙に寄せられた反省の言葉や悔悟の気持ちを受け入れ、傍観していた人も実は怖くて悩んでいたと気づき、感情のもつれがほぐれていきます。みんなもいじめと向き合い、手紙を通して崇と対話を深めます。

対等な立場の喧嘩と違い、いじめに勝ち負けはなく、相手を弱い立場に追い込み、抵抗できなくして一方的に攻撃し、心身に深刻な苦痛を与え続けます。

これを防ぐには「被害者」の立場に立ち、その苦しさを理解することが大切です。いじめが起きてても周りの「傍観者」が、いじめはよくないという態度を示すと「加害者」はいじめをしにくくなり、いじめを解決するには「被害者」「加害者」「観衆」「傍観者」それぞれが、いじめに向き合って対話することが大切です。

いじめは、いつどこで起きるかわかりません。身近にはなくとも、いじめについて考え、行動につなげることは、互いを尊重し、認め合う人間関係につながる、非常に大切なことではないでしょうか。

(終わり)